

# 紀 要

第 9 号

1 9 9 6 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 目 次

## 序

‘廃棄’を考えるー貝塚出土資料の検討にあたっての試論ー〔鈴木康二〕	1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動ーセタシジミの成長速度と年齢構成ー〔稲葉正子〕	11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕	16
篋状木製品の用途について〔松澤 修〕	25
縄文晩期土器棺墓の調査方法についてー近畿地方の場合ー〔中村健二〕	38
近江における弥生社会の理解にむけてーその方法と課題ー〔大崎康文〕	42
長浜市域における弥生時代の石器ー今川東遺跡出土石器を中心にー〔稲葉隆宣〕	51
石組みの煙道を持つカマドー古代の暖房施設試論ー〔上垣幸徳・松室孝樹〕	57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕	79
近江へのアプローチ・その3ー野洲・栗太をフィールドにー〔近江歴史クラブ〕	85
1. 野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕	89
2. 栗太・野洲における後期古墳の類型的把握 ー古墳時代システム論への墓制的アプローチー〔細川修平〕	94
3. 集落遺跡から見た古墳時代の特質ー古墳時代システム論への予察ー〔細川修平〕	102
4. 栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕	110
5. 近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕	122
6. 古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕	130
7. 田原道をめぐる二つの地域〔重岡 卓〕	136
8. 近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕	149
9. 栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕	157
10. 鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論 ー滋賀県の事例を中心にー〔大道和人〕	164
栗太・野洲郡のまとめ	179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川 靖〕	185
古代遺跡と出土文字資料〔濱 修〕	200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕	208
巡礼者の宿ー鴨田遺跡出土の巡礼札よりー〔重田 勉〕	215
焼物二話〔稲垣正宏〕	220
蒲生稲寸氏についてー近江古代豪族ノート5ー〔大橋信弥〕	224
律令神話に於ける農業神について〔造酒 豊〕	233

日本古代の対外関係史の一様相

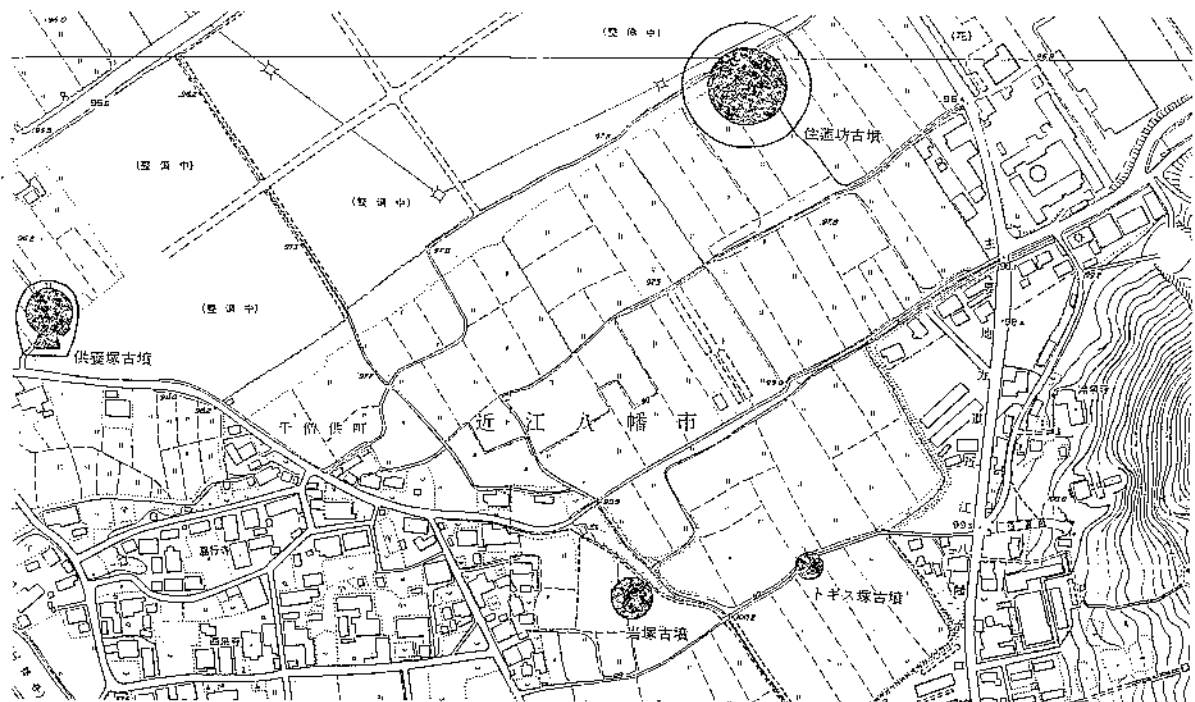
-日本古代史研究ノートあるいは覚書その2-〔芝池信幸〕 .....	238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 .....	243
新聞報道にみる文化財保護25年-新聞記事データベースの作成と利用-〔中川正人〕 .....	252



津に所在する瓢箪山古墳のそれと、きわめて近い構成をとっており、ほぼ同時期に築造された可能性が大きいからである。そこでまず両古墳群の内容を概観しておきたい。

### 1. 蒲生郡における古墳文化の展開

まず蒲生郡西部、かつての篠筈郷の領域内に、現在の行政区画では、安土町と近江八幡市にかけて、ひとまとまりの首長墓群が認められる。この地域でもっとも早く築造されたのは、織山の南麓の宮津に所在する、近江最大の前方後円墳安土瓢箪山古墳である<sup>(2)</sup>。盛り土は少なく、尾根の先端部を切断し、整形加工したものであるが、全長162メートル、後円部径90メートル、高さ18メートル、前方部幅70メートルを測る<sup>(3)</sup>。後円部には三つの主体部があり、いずれも堅穴式の石室をもち、その内部には長大な木棺が埋め置かれていた。三つの主体部はいずれもよく似た規模と形態をもっているが、中央の石室が特に立派で、副葬品も豊富であった。規模は長さ6.6メートル、幅1.3メートル、高さ1.1メートルを測り、木棺はすでに腐蝕し残っていなかったが、木棺の下に敷かれた粘土床に残された痕跡から、長さ6.2メートルで、割竹形木棺であることが判明した。副葬品としては、棺内に、き鳳鏡・二神二獸鏡各1面をはじめ、管玉23点、鉄形石・石釧・車輪石各1点、棺外に、鉄剣14本、鉄刀3本、鉄鎌23本、柳葉銅鎌30本、筒形銅器2本、堅板剝草綴短甲1領、鉄鎌3点、刀子5点、鉞4点、鉄斧7点、短冊形鉄板1点、異形鉄器1点などが認められた。これらの出土遺物から、その築造年代は、四世紀前半とみられる。この近くに瓢箪山古墳に続く首長墓の存在は知られておらず、南1.4キロメートルの同町中屋の常楽寺山山頂に、五世紀後半に築造されたとみられる、小型の前方後円(方)墳常楽寺山1号古墳(安土茶臼山古墳)<sup>(4)</sup>が所在している。周知のように、織山・安土山をはじめ、この地域の山や丘陵には、大規模



第2図 千僧供古墳群分布図

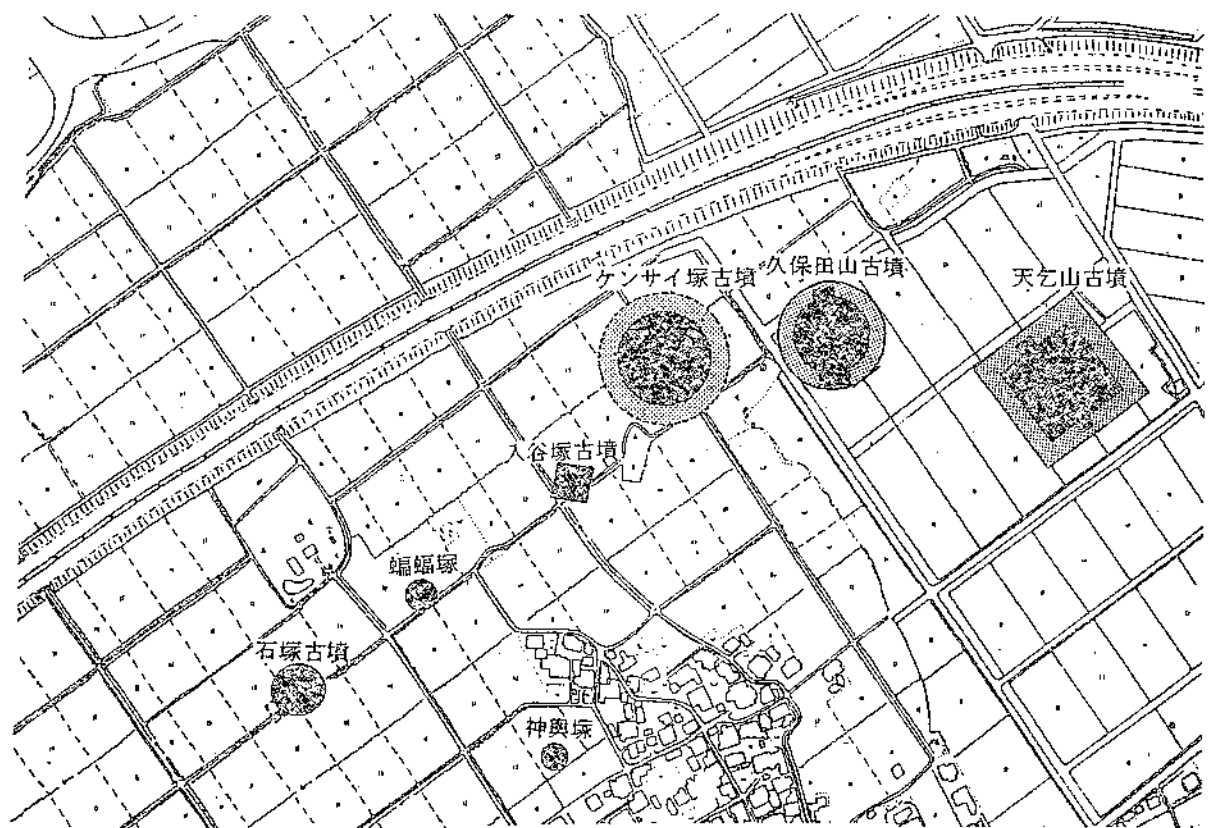
な中世城郭が築かれて、旧地形が大きく改変されたとみられ、すでに消滅した古墳も少なくなかったと考えられる。常楽寺山1号古墳は織山から南にのびる丘陵の、尾根最高部に所在し、北側が大きく削平されていたため、墳形は定かでないが、全長約30メートルの前方後円墳か前方後方墳とみられ、墳丘には円筒埴輪・各種器財形埴輪をめぐらし、主体部からは陶質土器をはじめ鉄小札や滑石製勾玉などが出土し、おおよそ五世紀後半に築造されたと考えられる。

また瓢箪山古墳の南5.5キロメートルの、同じく篠筈郷域に含まれると考えられる近江八幡市千僧供町には、五世紀中葉に築造されたとみられる、県下屈指の大円墳住蓮坊古墳(径53メートル)をはじめ、五世紀後半とみられる帆立貝式古墳供養塚古墳(全長50メートル)、六世紀前半の横穴式石室をもつ円墳岩塚古墳(径27.5メートル)、六世紀後半ごろの横穴式石室をもつ円墳トギス塚古墳(径14メートル)などからなる千僧供古墳群が所在している。大半が未発掘のため、その内容は明らかでないが、現在のところ織山南麓の古墳群に後続する首長墓群と推測される。このうち供養塚古墳は、全長50メートル、後円部径37メートル、前方部幅22メートルを測り、東側のくびれ部横に、幅6.5メートル、奥行き5メートルの造り出しをもち、幅10メートル、深さ1.5~2.5メートルの濠がめぐる。江戸時代に鏡1面、太刀1本、玉類多数が掘り出されたといわれ、1933年にも小石室から、短甲1領、刀剣12本などと、埴輪・須恵器・土師器が出土している。また1983年には、ほ場整備事業に伴い墳丘のまわりの調査がなされ、前方部の存在や濠の形態が明らかになり、濠の内外や造り出しの部分で、円筒埴輪・朝顔型埴輪・人物埴輪・家形埴輪・馬形埴輪などが、多数出土した。そして、この時には、隣接する住蓮坊古墳の確認調査もなされ、径53メートルの円墳で、濠を含めると径93メートルに及ぶ規模をもつこと、周濠から出土した須恵器により、五世紀中葉後半に築造されることが、明らかになった。<sup>(5)</sup>

いっぽう現在の八日市市・近江八幡市・竜王町・蒲生町にまたがって所在する雪野山の山頂(標高308.79メートル)には、全長70メートル、後円部径40メートル、前方部幅18メートル前後の古式の前方後円墳雪野山古墳が所在し、後円部は二段築成で、墳丘は自然の傾斜面を削り出して、窪んだ部分に盛り土をして造成している。墳丘斜面には葺石を貼り付けるが、部分的には岩盤を削り出して、葺石のように見せかけていた。埋葬施設としては、長さ6.1メートル、最大幅1.5メートル、深さ1.6メートルを測る、未盗掘の長大な縦穴式石室が検出された。副葬品では、三角縁神獸鏡3面をはじめ、内行花文鏡・だ竜鏡各1面、鍬形石・碧玉製琴柱・管玉各1点、竪櫛22本、鉄剣7本、鉄刀3本、鉄槍1本、鉄鏃33本、銅鏃92本、小札革綴冑・木製短甲各1領、鞆2点・同背負板1点、鉄鎌2点、刀子2点、ヤス5点、装飾壺1点、木製合子1点、木棒1点など豊富な出土があり、安土瓢箪山古墳に前後する四世紀中葉に築造されたとみられている。<sup>(6)</sup>

雪野山古墳に直接つづく首長墓の系譜は認められないが、雪野山古墳の東2.0キロの蒲生町大字木村・川合に所在する木村古墳群が、その系譜を引くものと考えられる。木村古墳群は本来9基以上からなるといわれているが、その概略の判明するのは5基にすぎない。

古墳群の中で最も早く築造されたとみられる天乞山古墳は、東西62メートル、南北65メートル、高さ10.5メートル以上の大型の方墳で、南北両側に方形の造り出しを持ち、周濠は幅22メートル




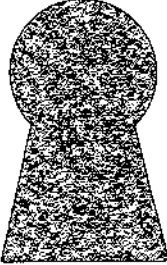
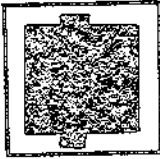

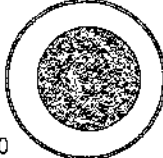







第3図 木村古墳群分布図

をはかる。墳丘は二段築成で、北側斜面に葺き石が認められる。割石積の竪穴式石室を主体部とするらしく、出土した円筒埴輪などから、その築造年代は、五世紀前葉に比定されている。

これに続くとみられるのが、天乞山古墳の西に所在する久保田山古墳で、径57メートル、高さ2.5メートルの大型円墳で、北側に幅13.5メートル、南側にも幅19メートルの造り出しを付設する。幅15メートルの周濠が廻り、周濠内から出土した埴輪によって五世紀前葉から中葉にかけて築造されたとみられている。この古墳に続くのが、古墳群のほぼ中央に位置するケンサイ塚古墳で、径70~80メートル、高さ10メートルの巨大円墳で周濠をもっていたらしい。1960年の調査で、剣・刀・鍬など多くの武器・工具・農具のほか、家形埴輪・円筒埴輪が出土しており五世紀中葉に築造されたと考えられている。そして、ケンサイ塚に続くのが一辺30メートル前後の方墳であったと推定される入谷塚（人刀塚とも）古墳か、古墳群の南端に所在した石塚古墳と考えられ、石塚古墳はすでに削平され実態は不明であるが、かつての測量図などから、40メートル級の円墳か、50メートル前後の帆立貝形古墳と推測されている。<sup>(7)</sup>

右にみたように、木村古墳群は、正規の前方後円墳こそ含まないが、大型の方墳・円墳によって構成される有力な首長墓群であって、この地域に五世紀代以来の有力な豪族の存在を裏付けるものであろう。

以上のように、蒲生郡の古墳文化は首長墓群の分布や配置と築造時期からみて大きく二つの地域に区分することが出来る。したがって、古墳時代の蒲生郡域はいまだ未知の部分も多々あるに

蒲生郡東部	蒲生郡西部
<p data-bbox="549 568 687 629">70 雪野山古墳</p> 	<p data-bbox="979 613 1174 674">162 瓢箪山古墳</p> 
<p data-bbox="525 1117 695 1178">65 天乞山古墳</p>  <p data-bbox="400 1296 552 1357">57 久保田山古墳</p>  <p data-bbox="604 1352 788 1413">80 ケンサイ塚古墳</p>  <p data-bbox="564 1520 684 1581">40 石塚古墳</p>  <p data-bbox="389 1592 429 1615">500</p>	<p data-bbox="1031 1330 1182 1391">53 住蓮坊古墳</p>  <p data-bbox="919 1458 1054 1491">平山1号古墳</p>  <p data-bbox="1038 1543 1190 1603">50 供養塚古墳</p> 
<p data-bbox="588 1722 703 1756">入谷塚古墳</p> 	<p data-bbox="1027 1700 1171 1760">27.5 岩塚古墳</p>  <p data-bbox="1046 1861 1190 1921">14 トギス塚古墳</p> 

第4図 蒲生郡における首長墓の展開



しても、四世紀中葉以降、支配領域の異なる二つの豪族により統括されていた可能性が高いと考えられるのである。ただ両地域とも、最初に築造された首長墓とその次代の首長墓の間に、現時点では数代の空白があることも事実であって、そこに別の解釈を生む余地も残されているが、<sup>(8)</sup>その後続する首長墓の展開をみる限り、過剰な解釈は謹むべきと考える。

## 2. 蒲生郡東部の古代豪族

蒲生郡内でとくに有力な古代豪族で、その西部の篠箭郷域、現在の安土町あたりに本拠を置いていたのは、奈良時代、平安時代と郡の大領・少領を歴任したことがみえる佐々貴山君氏であり、郡西部の首長墓の被葬者としてふさわしい豪族といえよう。<sup>(9)</sup>ところが郡東部の古代豪族として、確実なものとしては、近年発見された、平城京「長屋王家木簡」に蒲生郡西里の人とみえる佐々貴山君□万呂をはじめ、同じく「長屋王家木簡」・「二条大路木簡」に西里の人とみえる三家人広万呂・山代連甥万呂・明波漢人志己夫・調忌寸三田□・辛土君若子・民忌寸□□・佐々貴山□□□□・佐々支部桑原・星□連竹□、そして「平城京左京二条二坊十一・十四坪境小路遺跡出土木簡」に、必佐郷の人とみえる大伴部大山、<sup>(10)</sup>「正倉院古裂」(黄綾断片)の銘文に東生郡の人とみえる田尻小東人などに過ぎず、<sup>(11)</sup>郡領氏族佐々貴山君の進出が確認されるほか、有力な古代豪族については、史料も少なく従来より大きな課題になっているのである。そうした中で最も有力と見られているのが、そのウジ名に郡名を負っている蒲生稻寸氏である。

蒲生稻寸氏については、『古事記』神代巻の天照大御神と速須佐之男命のウケヒによって生れた神のうち天津日子根命を始祖とする十二氏の中にみえるだけで、これが近江の蒲生郡に居住していたことを始め、その実態についても、明確に裏付ける資料は確認されていない。そこでやや迂遠ではあるが、蒲生稻寸を除く十一氏の性格を検討しておきたい。

まず凡川内国造は、後の河内・摂津を本拠とする豪族で、『日本書紀』には「天津彦根命〈是凡川内直・山代直等祖也〉」とあるから、本姓は凡川内直で、天武十二年九月に連、同十四年六月に忌寸姓を賜わっている。ただし河内地方全域を押えていた国造ではなく、西摂の菟原郡あたりを本拠とし、その周辺部に勢力を伸長させていた豪族で、実質的な支配領域は、後の菟原郡域程度とみられる。同氏が凡川内国造に任命されたのは、その支配領域に所在する大和政権の瀬戸内航路確保の重要拠点務古水門を押えていたためとみられている。<sup>(12)</sup>

額田部湯坐連は、『日本書紀』では、一書(第七段)第三に、「天津彦根命、此茨城国造、額田部連等遠祖也」とあって、額田部連の一族のうちで湯坐の職掌にあたるものが額田部湯坐連を称したと考えられている。額田部は、田部の一種とする見解や、応神皇子額田大中彦の名代・子代とする見解があるが、その中央における管掌者であったと考えられる。なおその本拠は、後の河内国河内郡額田郷とみられている。

茨木国造は、『日本書紀』では、右にみたように額田部連と同祖であるとされ、『常陸国風土記』茨城郡条には、茨城国造初祖多祁許呂命の中男筑波使主を「茨城郡湯坐連等之初祖」としており、常陸国茨城郡の豪族で、湯坐とかかわるらしい。



が、詳細は不明。

高市県主は、後の大和国高市郡(奈良県橿原市)を本拠とする豪族。『日本書紀』天武元年七月条に高市郡大領高市県主許梅の名がみえる。天武十二年十月連姓を賜うとある。『新撰姓氏録』右京神別に高市連がみえ、「額田部同祖」とある。

最後に三枝部造は、三枝部(福草部)の中央における管掌者(伴造)である。天武十二年九月に連姓を賜うとあり、『新撰姓氏録』左京神別・大和神別に三枝部連がみえ、「額田部湯坐連同祖」とあり、顕宗天皇の御世に、三莖之草を採取して奉献したので、三枝部造を賜姓されたとみえる。ただ『日本書紀』顕宗三年四月条に、「置福草部」とあり、顕宗の名代・子代であるとして三枝部造氏を後の加賀国江沼郡三枝郷の豪族で、その一族が顕宗の乳母を出したのではないかとされている<sup>43</sup>。

以上の検討により、蒲生稻寸氏と同祖を主張する諸氏の性格が、おぼろげながら明らかになってきた。それを要約するなら、(一) 国造・県主・稻置など、大和政権の「地方官」が過半を占める。(二) ただその支配領域は後の郡あるいはそれ以下の小地域である。(三) 湯坐あるいは名代・子代の管掌者が多数を占めている。(四) これら同祖氏族の結節点として、額田部湯坐連氏が確認される。

これらによって、蒲生稻寸氏についても、史上にはみえないが、大王に湯坐的な職掌をもって奉仕する伝統をもつ氏族であり、朝廷に乳母を出した可能性も考えられるのである。そこで次にカバネ稻置についても、少し検討しておく必要がある。

カバネ稻置については、『日本書紀』成務五年九月条に「県邑置稻置」とあり、『隋書』倭国伝に「八十戸置一伊尼翼、如今里長也。十伊尼翼属一軍尼」とみえ令制以前の地方官の職名とみられている。第1表のように稻置を含む氏名や人名の分布をみると、大和とその近国の後の郷名に該当するものが多く、その職掌について、初期大和政権とつながりの深い朝廷領の徴税官とする見解や、『日本書紀』大化元年八月条にみえる「県稻置」などから、クニ(国造)の下部組織である県(コホリ)の長官の官職とする見解があり、また大國造の下に所属する小國造的首長層を県(コホリ)の首長として組織化した官職とする見解などがある<sup>44</sup>。

稻置が国造のクニに比較して、かなり小さな地域の首長であることは間違いないが、それが大和政権の古い官職であるかどうかは決め手が欠ける。『隋書』や孝徳紀の記載などは、逆にこれが意外に新しいカバネであることを示唆するようにも考えられる。したがって稻置は、国造のクニを分割して新しく設定されたコホリの首長に与えられた官職的なカバネではなかるうか。

右のように考えられるなら、蒲生稻寸の場合も、後の蒲生郡域の内部に設置された蒲生コホリの首長として、大和政権に従属していたことが想定される。そしてその関係は、各地の国造と同じように、より朝廷に密接な奉仕の関係を結んでいたと考えられる。カバネ稻置の由来は、右にみたように新しいとしても、蒲生稻寸氏の場合は、さきにみた同族の性格からみて、古い段階から大王の内廷に直接奉仕していた可能性が高く、それが後にカバネ稻置を賜う因になったともいえるのではなかるうか。

ところで蒲生稻寸氏の本拠については、史料的に蒲生郡内に居住していたことを証するものがないほどであるから、全く手がかりはないといえるが、蒲生なる地名が、蒲生郡東部にかかわるらしい点は注目される。蒲生郡には『和名抄』で九郷を数えるが、そのうち東生郷・西生郷が、東蒲生・西蒲生を略したと考えられており、東生郷は現在の日野町域とか八日市市域に比定する見解もあるが、現在の蒲生町田井にある小字蔵ノ町に注目して、蒲生町全域をこれに当てる見解が有力である。また西生郷についても、蒲生町域や一部日野町域、或は竜王町山之上の小字倉ノ町に注目して竜王町南東部とする見解もある<sup>104</sup>。

いずれにしても、蒲生なる地名が、現在の蒲生町域を中心とする地域であった可能性は高く、蒲生郡東部の古称であったことは間違いないと考えられよう。したがって蒲生稻寸氏の本拠も、おそらくこの地域の中に比定することができ、現時点では、蒲生郡東部の首長墓群の被葬者として最有力といえるであろう。

おわりに

以上、蒲生郡における古墳文化の特質と、それに対応する古代豪族について若干の検討を加えた。その結果従来不分明な点が多かった、郡東部の古代豪族として、蒲生稻寸の存在があらためて浮上してきた。ただ史料的には多くの問題が残されており、今後の課題とするほかない。

## 註

- (1) 雪野山古墳発掘調査団編『雪野山古墳発掘調査概報』（八日市市教育委員会 1993）
- (2) 梅原末治「安土村瓢箪山古墳」（『滋賀県史跡名勝天然記念物調査報告』第七 1937）
- (3) 古墳の規模については、近年の測量などによって、用田政晴氏による新しい見解が示されている。傾聴すべき点も多いが、いちおう正式報告書の刊行を待って、訂正したい。ちなみに用田氏による計測値は、全長137メートル、後円部径78メートル、高さ16メートル、くびれ部幅50メートルである。（用田政晴「三つの古墳の墳形と規模」『紀要』第3号、滋賀県文化財保護協会、1990）
- (4) 中村博司ほか『常楽寺山古墳群調査報告書』（安土町教育委員会、1977）
- (5) 丸山龍平「中世以前の竜王町」（『竜王町史』上巻、1987）
- (6) 雪野山古墳発掘調査団編『雪野山古墳発掘調査概報』（八日市市教育委員会、1993）
- (7) 北川浩「木村古墳群の現状について」（『滋賀考古』第6号、1991）、田中浩「古墳文化の展開」（『蒲生町史』第1巻、1995）
- (8) 細川修平「二つの前方後円墳」（『紀要』第7号、滋賀県文化財保護協会 1994）
- (9) 蒲生郡の古代豪族については、大橋信弥「豪族の分布」（『蒲生町史』第1巻、1995）を参照
- (10) 『平城宮発掘調査出土木簡概報（21）（24）（27）』（奈良国立文化財研究所、1990・1991・1995）
- (11) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和63年度（奈良市教育委員会、1990）
- (12) 「正倉院古裂（黄綾断片）」『正倉院宝物銘文集』91
- (13) 吉田 晶「凡河内直氏と国造制」（『日本古代国家成立史論』、東京大学出版会、1973）
- (14) 角田文衛「愛宕郡と山代国造家」（『古代文化』第27巻第9号、1975）
- (15) 井上辰雄「三枝（福草）部について」（遠藤元男編『関東の古代社会』、名著出版、1989）
- (16) 井上光貞「国造制の成立」（『史学雑誌』60-11、1952）
- (17) 石母田正『日本の古代国家』（岩波書店、1971）
- (18) 『滋賀県の地名』（日本歴史地名体系25、平凡社、1991）

編 集 後 記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年には当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしへの渡りびと—近江の渡来文化—』や、それと関連したシンポジウムを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。 平成8年3月

平成8年3月

紀 要 第 9 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668